

高美小学校内 TM だより

R7.10.3. NO.21

3年1組の算数の授業におじゃましました。

★導入で一気に引き付ける★

まずは前単元のマスターロードの確認から始まりました。前単元の内容は身につけているか、算数の用語を正しく使うことができそうか、それぞれ振り返りました。その後…「クラスみんなでわなげをしよう」画面に映し出されたわなげの画像と、羽倉先生のこの一言で、子どもたちの目の色が一気に変わりました。「何か算数と関係あるのかな?」「どんなことすんの?」全員の興味が引き付けられました。今日から始まる単元は「円」についての学習です。そのことはまだ告げずに、子どもたちにとって身近な課題を設定することで、全員が参加することができるよう工夫されていました。ひとしきり盛り上がったあと、「そしたら切り替えようか。」という先生の言葉で、算数モードに切り替わりました。

★体験を通して★

「わなげに必要なものは?」先生の問いかけに対して、「わっか」「まど」「どこから投げるかの線」などなど、たくさんの発言がありました。そのなかの言葉から「自分が立つ場所と的の位置を考えよう」と、本時のめあてを設定されました。子どもたちの頭の中には「円の学習」ではなく「わなげのルール決め」があります。算数に苦手意識をもっている子も、楽しんで、一生懸命考える様子が見られました。「もし、まどが一つだけあるとしたら、どこから投げことにすると全員が平等か」ということを全員で考えました。黒板に一人一つずつ磁石をつけていきました。「全員がまどから同じだけ離れて投げる」ということを考えながら磁石をつけると、そのうちに何人かの子が「円の形にするとよい」ということに気が付きました。作業を続けていくと、まどを中心とした円が完成しました。体験を通して、子どもたちの中に円の性質がすりこまれていくようでした。

～まとめ～

単元の導入に、課題を自分事としてとらえることができると、子どもたちの自ら学ぶ意欲が高まるということが、9月の校内授業研でも話題となりました。今回の授業は、まさに「課題を自分事としてとらえる」ということを狙った工夫がされていると感じました。加えて、知識を教え込まれるのではなく、体験を通して知識を身に着けていくことによって、子どもたちは感覚的に理解を深めていくようでした。本時は単元の導入でしたが、今後の授業の展開でも、「円の中心から、円周までの長さはいつも同じ」という今回の気付きに立ち返りながら学習を進めることで、より円の性質についての理解が深まるのではないかと思います。羽倉先生、3年1組のみなさん、ありがとうございました。

